大決壊！
おむつはお守り

大決壊！
おむつはお守り

レモネード通信vol.1

簡単な既刊案内☆
鳴海也先生に以前描いてもらった大決壊！02の簡単なご紹介です☆

まだ、夜のおむつが取れない、

少女……イリア。

『おもらしって……、
気持ちいい？』

自慰を知らずに、
思春期を迎えたイリアは、

イケナイ感覚に
目覚めてしまう……

ある日、下校中……。

お腹を壊してしまった
イリアは……、

トイレに辿り着けず、
……漏らしてしまう。

そのことがきっかけで、
ドキドキしてしまい……、

イリアは学校で、
わざとおもらしをして……、

ショーツと黒タイツを
汚してしまう。

おまた、気持ちいい……。

そのことに気づいたイリアは、
家に帰っておまたを弄び……、

新たな快楽に目覚める――。

大決壊！02～芽生え～

DLsiteで好評配信中！

大決壊！
おむつはお守り

♪ 橘（たちばな） エリス
学校の発表会で、我慢できずに……。

「ンン……もう朝なの……？」

天蓋付きのキングサイズのベッドで目を覚ましたのは、銀髪の小柄な少女だった。
少女の名前を、橘エリス、という。
口数が少なく、表情の変化にも乏しい、お人形のような女の子だ。
日本では名の知れた大企業――楽器から自動車のエンジンまでを手がける――その一人娘として、大事に育てられている。

エリスは、ベッドから身体を起こす。
そして一言……、

「ああ、またやっちゃったの……」

頬を赤らめて、悔しそうに呟いた。
フワッとしたワンピース型のパジャマの裾をめくり上げると、エリスのお尻を包み込んでいるのは、モコモコのテープタイプの紙おむつだった。

エリスは、この年になってもおねしょが治らないから、寝るときはおむつを充てて寝ることにしているのだった。

そのおまたの部分は、鮮やかなレモン色に染め上げられていて、お尻の方にまで広がっている。
だけど不幸中の幸いか、おむつの外側にまであふれ出してきているということはなさそうだった。

「グショグショで気持ち悪いの……」

おしっこを吸収した紙おむつはモコモコに膨らんでおしっこを封じ込めてくれるけど、時間が経つと冷えてブヨブヨになって気持ち悪くなってしまう。
どうやら夜中におもらしをしてしまったみたいで、お尻にはひんやりとしたおむつがまとわりついてきていた。

「早く交換したいの……」

エリスが呟くと、部屋のドアがノックされる。
顔を出したのは、エプロンドレスのメイド服に身を包んだ女性だった。
目が覚めるようなブロンドを結わえ上げて、頭にはカチューシャを乗せている。

「エリスお嬢様。お召し物の交換に参りました」
「マリア……。今日も……、しちゃったの……お願い……」

「はい、エリスお嬢様」
「……ねえ、マリア」
「なんです？」
「その、二人きりのときくらいはエリスって呼んでって言ってるでしょう？　その……お姉ちゃんみたいだし……」
「分かりました、エリス。それじゃあ、おむつの交換、しちゃいましょうね♪」
「ん……っ」

　マリアにされるがままに布団に仰向けにされると、エリスは足を広げてみせる。
　鮮やかに染め上げられた紙おむつを見られるという、恥ずかしすぎるポーズ。
　だけど小さいころからマリアにおむつを交換してもらってきたから、それもなんとか我慢できた。

「それじゃあ剥がしちゃうからねー」
「お、お願い……」

　マリアは宣言すると、バリバリと紙おむつのテープを剥がしている。

　……ムワッ。

　ツーンとした濃縮されたアンモニア臭が、朝の清澄な空気に立ち昇る。

露わになったのは陰毛の一本さえも生えていないつるつるのおまただった。

早い子は修学旅行のときに生えているのをみたけど、エリスの一本筋には産毛さえも生えてくる気配はなかった。
ただ、おしっこに濡れた花びらは、おねしょを咎められるのを怖がっているかのようにヒクヒクッ、小刻みに震えている。

「ごめんなさい……マリアに、こんなことさせちゃって」
「私は全然気にしてないですよ？　むしろエリス可愛い～って抱きしめてあげたいくらいですから」
「そ、それは恥ずかしいからやめてなの」
「ええ。我慢します。そういえば、今日は学校の発表会でしたっけ？」
「うん。合唱コンクール。エリスはピアノを弾く係なの」
「それじゃあ……昼もおむつ充ててたほうがいいですよね」
「う、うん……」

エリスは頬を赤らめながら頷く。
エリスはおねしょ癖が抜けていなかったし、それに極度に緊張すると、おもらししてしまう癖もあったのだ。
合唱コンクールの舞台なんかに立ったら、間違いなくおもらししてしまうことだろう。

マリアは用意してきたお湯とお手拭きで、おまたを綺麗に拭いていってくれる。

グショグショになったおむつを、お尻とベッドのあいだから引き抜いて、お尻も綺麗に拭いてくれた。

「それじゃあ、新しいおむつ、あててあげますからねー」
「お、お願い、なの……」

新しい紙おむつをお尻の下に敷かれると、おまたを包み込むようにして生地をあてていかれる。
その紙の生地を、横からテープで留めれば、紙おむつの完成だ。

ポンポンッ。
マリアは、おむつの上からエリスのおまたを軽くはたく。

「はい、完成です♪」
「はふう……。お尻も、おまたも、温かいの……」

エリスは、こうしてマリアにおむつの上からおまたをはたいてもらうことが大好きだった。
なんだか安心できるような気がするのだ。
だけど、ちょっと力を抜きすぎただろうか？

プシュッ――。

新しいおむつを充ててもらったばかりだというのに、ちょっとだけチビってしまった。

「エリス……もしかして、もう？」
「だ、大丈夫。これくらい」
「ダメそうなら早く言って下さいね？　さてさて、おむつを充ててあげたから、次はお洋服ですねー。せっかくの晴れ舞台だから、可愛いお洋服がいいですよね」
「うん……。マリアに任せるの」
「任されました。任せて下さい♪」

嬉々とした笑顔を浮かべた、姉のようなマリアによって、エリスはあっという間に着せ替えられていくのだった。

☆

「マリアが着せてくれたお洋服……。ちょっと可愛すぎるかも……。恥ずかしくない……？」

いつものように大型リムジンで登校してきたエリスは、頬を赤らめてしまった。

マリアが選んでくれた洋服は、シックな紺色の上着に白のシャツ。
胸にはピンクのリボンがついている。
そのリボンよりも大きいものが、銀色の髪の毛をまとめ上げていた。

そして極めつけが、気合を入れろといわんばかりに短いスカートだった。
ふりふりのフリルがついたスカートは、ちょっとでも気を抜いたら、パンチラならぬオムチラをしそうで怖い。

「おはよう、エリスちゃん」
「……おはよう」
「エリスちゃん、今日も可愛いリボン」
「……ありがとう」

挨拶を交わしてくれるクラスメートたち。
このつぼみ学園は、エリスの父親が私財を投じて運営している学校だった。

教室に行くと、今日は年に一度の合唱コンクールということもあって、みんな気合十分のようだ。
発声の練習をしたり、前髪を気にしたりと、教室は落ち着かない雰囲気に包まれていた。

今日は授業はない。
全校生徒が文化ホールに集まって、一日をかけて歌声を競うことになっている。
クラス対抗のコンクールで優勝することは、どのクラスでも一つの大きな目標となっていた。
もちろん、そのためには優秀なピアノの演奏者も重要になってくるわけで……。

担任が入ってくると、クラスメートたちは大人しく席につく。
そんな生徒たちに、担任は言う。

「今日は年に一回のコンクールだ。みんなの青春の１ページに、今日という日を刻みつけられるように頑張ってくれよな！」
『はーい』

そして担任はエリスに視線をやると言うのだった。

「橘、今日のピアノの演奏は任せたぞ」
「……はい。先生。精一杯頑張ります」

エリスは教師の言葉に、無表情で頷く。
ただ、表情には出ていないが……。
エリスの小さな身体、その両肩には、じわじわと重たいプレッシャーがのしかかっていた……。

☆

「もうすぐエリスたちの順番……」

エリスは、ピアノ演奏者が通される楽屋で、一人呟いた。
合唱コンクールは一年生から順番に発表していき、エリスたちのクラスはクライマックスを飾ることになっている。

緊張しないようにと楽譜に視線を落としていたけど、どうしても気になってしまうことがあった。
……それは。

「見えてない……？　もう、マリアったらこんなに短いスカート選ぶなんて……」

エリスは姿見の前に立って、自らの姿を映し出してみる。
ちょっとおめかしした可愛らしい洋服に身を包み、自信なさげな表情を浮かべた少女の顔が覗き込んできていた。

スカートを捲り上げてみると、そこにはモコモコに膨らんだ紙おむつが露わになる。

「おむつ……ちょっとカサカサしてるけど……隠しきれてる、よね……。見えて、ない、よね……？」

短いスカートの裾を整えると、紙おむつをなんとか隠すことはできているようだった。
……大丈夫。
ちょっとだけお尻が膨らんで、セクシーになっているような気もするけど。

（大丈夫、大丈夫……。なにも緊張することはない……。いっぱい練習してきたし、絶対に失敗しない……）

自分に言い聞かせるように、何度も心の中で呟く。
……が。
小さな身体は正直だった。

ブルルッ！

エリスは、急に寒気を感じると、身震いしてしまう。
緊張のあまり、トイレに行きたくなってしまったのだ。

「どうしよう。こんなときにおトイレ行きたくなっちゃうなんて」

タイミングが悪いことに、楽屋の外からは、一つ前のクラスの歌声が聞こえてきている。
今からトイレに行っていては間に合わないだろう。
ピアノ演奏者がトイレに行って出てこないなんて、恥ずかしすぎる。

「最後まで、我慢しないと……」

大丈夫。
ほんの数分間ピアノを弾くだけなのだ。
たったそれだけの短い時間を我慢すれば、それでいい……。
我慢すると心に決めると、ちょうど楽屋のドアがノックされた。
顔を出したのは、クラスメートの女子だった。

「エリスちゃん、もうそろそろ出番だよ？」
「うん。分かったの……」

　エリスは人知れず尿意を抱えながら、楽屋を後にする……。

☆

　楽屋から舞台袖に行くと、そこにはクラスメートたちが緊張した面持ちで控えていた。
　クラスメートたちは、

「エリスちゃん、緊張するね……」
「最後だから、みんな注目してるよ……」

　ヒソヒソ声で話し合っていた。
　こうして待つこと数分。
　舞台で歌っているクラスが終わると、次はエリスたちの番だ。
　担任はやる気満々のようだ。
　舞台袖に立って、生徒たちに指示を出している。

「それじゃあ……、まずは指揮者を先頭に舞台に上がってくれ。おっと、橘は最後でいいぞ」

　他のクラスメートたちに混じっていこうとするエリスだけど、担任に止められてしまった。
　そういえば……、

ピアノ演奏者は、最後に舞台に入って、みんなの前で一礼することになっていたのだ。
エリスは、緊張するあまり、そのことを忘れてしまっていた。

「大丈夫……。緊張なんてしてないんだから……」

何度も言い聞かせても、手のひらからは汗が止まってくれない。
こういうときは、手のひらに『の』の字を書いて飲み込めばいいって聞いたことがあるから、

「の、ののの、のの字……ごくんっ」

震える指先で書いて飲み込むも、空気を飲み込んでしまって、

プシュッ！

おまたに広がる、じんわりとした生暖かい感触。
どうやら、ちょっとだけチビってしまったようだ。
緊張するあまり意識していなかったけど、膀胱はキシキシとした痛みを感じるほどに膨らんでいた。
お腹のなかで水風船が膨らんでいるみたいだ。

（お、おトイレ行きたい……）

今からでも行かせてもらえないだろうか？
そんなことを思っていると、しかし現実というのは無情だった。

『それでは最後のクラスになります。はたして優勝候補の筆頭として期待されているこのクラスは、どんな感動的なラストステージを聴かせてくれるのでしょうか!?』

無駄にハードルを上げる司会者に、指揮者の生徒を先頭として、クラスメートたちが舞台へと上がっていく。
舞台袖に残されたエリスだったが、

「それじゃあ期待してるからな。ピアノ、頑張ってくれよ」

なにも知らない担任に背中を押されて、エリスはよろめきながらも舞台に立つことになった。

（やだ……。みんな、見てるの……っ）

舞台の中央まで歩いてきたエリスは、観客たちに向き合う。
父兄たちも来ているから、絶対に失敗はできなかった。
よほど銀髪のエリスのことが珍しいのだろう。
奇異の視線で、エリスは見つめられることになった。

「あらあら……。お人形みたいに可愛らしい……」
「肌なんて、透けるように真っ白……」
「この学園の理事長の娘さんらしいわよ……？」

ザワザワとした声だけど、エリスに向けられている言葉は聞き取ることができてしまう。

可愛らしい、将来が楽しみ、ピアノが弾けるなんて……。
そんな賛美の言葉を並べてくれる保護者たちだけど、まさかエリスがスカートの下におむつを穿いているなんて想像さえもしていないだろう。

（ああっ、だめぇ……。そんなにエリスのこと、見ないで……）

舞台の中央に立っているエリスを、スポットライトが照らし出す。
リハーサルでは、ここでエリスが一礼をして、ピアノへと歩いて行く予定になっていたが……。

（ううっ、お腹、苦しくて……お辞儀、できない……っ）

水風船のように張っている膀胱を抱えたままお辞儀なんて、できるはずがなかった。
少しでもかがんだら、プシュッとやってしまいそうだ。

（ああ、こんなエリス、見ないで……。そんなに見られたら緊張して……えっ、えええ……？）

ジュワ……ッ。

おまたが生暖かくなったと思ったときには手遅れだった。
大事な部分を、イタズラっぽくくすぐられる感触に、エリスの膀胱は決壊してしまっていた。

（うそ……。エリス、おもらししちゃってるの……？　みんなに見られてるのに……っ）

ぷしゅ、しゅいいい……。
　しゅわわわわわわわわ……。

（う、うそ……勝手に漏れちゃってる……？　ああ、だめ、おまたが暖かくなって……くすぐったいよ……）

おむつに弾けたおしっこが、パシャパシャとおまたをくすぐっている。
そのむず痒さに、エリスの尿道は更に解けていくことになった。

しょわわわわわわわわ……。

（おしっこ、止まらない……。ううっ、勝手に出てきちゃって……ああ、おまた、温かいよ……）

垂れ流し……。
その状態は、まさに垂れ流しといっても過言ではなかった。
エリスは、緊張のあまりに、おしっこを垂れ流しすることになってしまっている。

（お願いします。せめて音だけは、誰にも聞こえないで……）

おむつの中では、おしっこが飛び跳ねて、おまたを濡らしてから吸水ポリマーへと染みこんでいっている。
その音が誰かに聞こえないかと、気が気ではなかった。
それにこんなに漏らしていると――。

（ううっ、おむつ、モコモコになってきちゃってる……！　足のあいだで、膨らんできちゃってる……っ）

短いスカートからおむつが見えていないだろうか？
エリスは内心、気が気ではなかった。
それでもなんとか無表情のままでいられるのは、普段からあまり表情を表に出さなかったからだろう。

しゅいいいいいいいいい……。
もこもこ、もこもこもこ……。

勝手に漏れ出してしまうおしっこに、おむつが入道雲のように広がっていく。
垂れ流されるおしっこは、お尻のほうにまでその温もりを広げていた。

（くすぐったいよぉ……）

パシャパシャと、おむつの内側に弾けるおしっこ。

「ぁっ、ぁっ、ぁっ、ぁっぁっぁぁぁ」

おまたをイタズラっぽく撫で回される感触に、ついにエリスは小さく呻いてしまう。
酸欠になった金魚のように口をパクパクさせながら。

もこもこと、太股のあいだで盛り上がってくる感触。
おしっこを吸った紙おむつは、ずっしりと重たくなってくる。
いくら最近の紙おむつが優れているとはいえ、質量保存の法則には敵わない。
漏らした分だけ、おむつは重たくなるのだ。

（お願い、スカートから見えないで……。おむつ、ずり落ちてこないで……重たくなって、きてる……ううっ。脚の間で、たぷたぷしてるの……っ）

じょぼぼぼぼぼぼぼぼ……。
ブルルッ！

小さな身体が、一度だけ大きく震える。
それはこの公開失禁が終わった合図でもあった。

（終わって……くれた？　おしっこ、止まってる……？）

そんなことを考えながら、スカートのおまたの部分をギュッと握りしめる。
……大丈夫。
なんとかおしっこは止まってくれたようだ。

紙おむつは、エリスの失敗を、優しく受け止めてくれたのだ。
だけど、もう紙おむつは限界みたいだった。

（たぷたぷして……モコモコしてるの……。おしっこで、おむつ、落ちてきそうなくらい重たくなってるよ……っ）

このまま立っていたら、いつ紙おむつが落ちてくるかも分からなかった。
それでもエリスは、なんとか観衆に向けて一礼をする。
それはとても小さな会釈だった。
もしもここで深くお辞儀なんてしたら、後ろに立っているクラスメートたちに、モコモコに膨らみきっている紙おむつを見られてしまうかもしれなかった。

エリスが一礼をすると、会場が割れんばかりの拍手に包まれる。
その拍手を背に、エリスはピアノの前に置かれている椅子に座るが……、

グチョッ。

（あううっ、気持ち悪い……）

スライム状になった紙おむつが潰れて、お尻の割れ目に食い込んできた。
それでも、顔に出すわけにはいかない。
そして演奏を放棄するわけにはいかなかった。

（お願いします、神様。早く演奏が終わって下さい……。そうしないと、エリスはおかしくなってしまいます……！）

――それからの記憶は、あまり定かではなかった。
必死になって鍵盤に指を躍らせ、ペダルを踏むたびに、

グチョッ、グチョチョッ！

スライム状になったおむつがおまたやお尻にまとわりついてきて、それでもエリスはその気持ち悪い感触に耐えながらも演奏を続けていった。

しょわわわわわわわ……。

おまたが再び生暖かくなっている感触。

（やだ……また漏れ出しちゃってる……。おしっこ、勝手に漏れてきちゃってるの……！）

スカートのなかが、妙な感じで蒸れてくる。
それにスカートが微かに湿っているような感触もする。
もしかしたら、おむつから横漏れしてきて、スカートにはスタンプのように尻染みができているかも知れなかった。

（でも、みんなのために、最後まで頑張らないと……！）

おもらししながらも、なんとか頑張れるのは、みんなの歌声があったからだと思う。
みんなと一緒にたくさん練習してきたのだ。
それを、エリスの失敗で台無しにするわけにはいかなかった。

「はぁ……、はぁ……、はぁぁ……」

最後のオタマジャクシを弾き終えたとき、エリスの頬は桃色に上気していた。
エリスは、なんとかピアノを弾ききることができたのだ。

（やっと、終わった……。ああ、もうおむつ、グチュグチュになってる……。落ちない？　大丈夫？）

ぼんやりとした意識のなか、なんとか椅子から立ちあがる。
最後は演奏者であるエリスが、みんなの前に立って一礼をしなければならなかった。

（やだ、お尻、湿ってる……）

そっとお尻を触ってみると、やはりおむつから横漏れしていたのだろう。
スカートのお尻の部分は、かすかに湿っていた。
指先の匂いを嗅いでみると、ツンとしたアンモニア臭が鼻を突く。

（お願い、こんなエリスを見ないで……）

それでもここで逃げるわけにはいかなかった。
エリスはみんなの前に立つと、軽く一礼をする。
すると観衆たちは、まさかエリスがおもらしをしているとは知らずに拍手喝采し、様々な美辞麗句を並べるのだった……。

☆

「な、なんとか終わった……。みんなに、バレてないよね……？
エリスがおしっこ漏らしちゃったなんて……」

演奏を終えたエリスは、おぼつかない足取りでなんとか楽屋へと戻ってきた。
幸いなことに最後の演奏者だったので、楽屋には誰もいなかった。

「ああ……。やっぱりスカートに染みになっちゃってるの……」

姿見の前に立って、自らの姿を映し出してみる。
お尻の部分を映し出してみると、シックな色のスカートには暗い染みが浮き上がっていた。
お尻の両脇に一つずつ。
それはおむつから横漏れしてしまった恥ずかしい染みだった。

「マリアに怒られちゃう……。でも、全部弾けてよかったの……」

　エリスは姿見の前で、自らの姿と向き合う。
　ほっぺたを桃色に染めて、自信なさげに覗き込んできている自分の姿。
　そんな少女は、スカートを捲り上げる。

「こんなに漏らしちゃってたなんて……」

　ッ〜ン……。

　としたアンモニア臭が、狭い楽屋に満たされる。
　短いスカートから露わになったのは、鮮やかなレモン色に染め上げられて、もこもこに大きく膨らんだ紙おむつだった。

「もう、たぷたぷ……。それに……ずっしり重たくなってるの……ああ、こんなに厚くなってる……」

　その感触を確かめるように、エリスは右手で自らのおまたを包み込んでいるおむつを撫でたり、軽く押したりする。
　が、幼い身体はすぐに、身体を小さく震わせる。

「おしっこの匂い嗅いでたら……またおしっこしたくなっちゃった……。ここで、しちゃうの……？　ダメだけど……、でも、おむつ当ててるから大丈夫……？」

エリスは、戸惑いながらもおまたの力を抜いていった。
ジュワッとおまたが生暖かくなって、

しゅいいいいい……。
ぽしゃ、ぽしゃぽしゃぽしゃ……。

おむつからくぐもった水音が聞こえてきて、大きく膨らんでいた紙おむつが、更に大きく膨らんでいく。
舞台でおもらししてしまったとはいえ、無意識のうちにブレーキがかかっていたのだろう。
だけど今のエリスは、すっかり紙おむつに身を任せている。
おむつは、エリスの失敗をすべて受け止めてくれるのだ。

「ああ、温かい……。気持ち、いいの……」

ぷしゅいいいいいいい……。
もこ、もこもこ……。

エリスは頬を弛緩させて、恍惚とした表情を浮かべて尿意を解放している。
そんな失敗も、紙おむつはすべて受け止めて、優しくお尻を包み込んでくれる……。

「ふっ、ふう……っ」

ブルルッ！

エリスは小さく身体を震わせて切なげなため息をつくと、何事もなかったかのようにスカートの裾を元に戻すのだった。

☆

だがこのとき、エリスは知るよしもなかった。
合唱コンクールで見事に優勝することができたエリスたちのクラスは、学園のホームページに大々的に載ることを。
その代表として、舞台に立つエリスの写真が載ることを。
エリスはまだ知らない。

そして観衆も知らない。
大きく膨らんだスカートのなかで、エリスが失禁していると言うことを……。

誰も知らない、スカートのなかの秘密。

♪おしまい

～次のページから既刊案内！～

ブルマ、
脱げなくて

大決壊！
レモンの水たまり

大決壊！
おむつはお守り

たちばな
♪ 橘 エリス

学校の発表会で、
我慢できずに……。

「ンン……もう朝なの……？」

天蓋付きのキングサイズのベッドで目を覚ましたのは、銀髪の小柄な少女だった。
少女の名前を、橘エリス、という。
口数が少なく、表情の変化にも乏しい、お人形のような女の子だ。
日本では名の知れた大企業――楽器から自動車のエンジンまでを手がける――その一人娘として、大事に育てられている。

エリスは、ベッドから身体を起こす。
そして一言……、

「ああ、またやっちゃったの……」

頬を赤らめて、悔しそうに呟いた。

フワッとしたワンピース型のパジャマの裾をめくり上げると、エリスのお尻を包み込んでいるのは、モコモコのテープタイプの紙おむつだった。

エリスは、この年になってもおねしょが治らないから、寝るときはおむつを充てて寝ることにしているのだった。

そのおまたの部分は、鮮やかなレモン色に染め上げられていて、お尻の方にまで広がっている。
だけど不幸中の幸いか、おむつの外側にまであふれ出してきているということはなさそうだった。

「グショグショで気持ち悪いの……」

おしっこを吸収した紙おむつはモコモコに膨らんでおしっこを封じ込めてくれるけど、時間が経つと冷えてブヨブヨになって気持ち悪くなってしまう。
どうやら夜中におもらしをしてしまったみたいで、お尻にはひんやりとしたおむつがまとわりついてきていた。

「早く交換したいの……」

　エリスが呟くと、部屋のドアがノックされる。
　顔を出したのは、エプロンドレスのメイド服に身を包んだ女性だった。
　目が覚めるようなブロンドを結わえ上げて、頭にはカチューシャを乗せている。

「エリスお嬢様。お召し物の交換に参りました」
「マリア……。今日も……、しちゃったの……お願い……」
「はい、エリスお嬢様」
「……ねえ、マリア」
「なんです？」
「その、二人きりのときくらいはエリスって呼んでって言ってるでしょう？
その……お姉ちゃんみたいだし……」
「分かりました、エリス。それじゃあ、おむつの交換、しちゃいましょうね♪」
「ん……っ」

　マリアにされるがままに布団に仰向けにされると、エリスは足を広げてみせる。
　鮮やかに染め上げられた紙おむつを見

られるという、恥ずかしすぎるポーズ。
　だけど小さいころからマリアにおむつを交換してもらってきたから、それもなんとか我慢できた。

「それじゃあ剥がしちゃうからねー」
「お、お願い……」

　マリアは宣言すると、バリバリと紙おむつのテープを剥がしている。

……ムワッ。

　ツーンとした濃縮されたアンモニア臭が、朝の清澄な空気に立ち昇る。
　露わになったのは陰毛の一本さえも生えていないつるつるのおまただった。

　早い子は修学旅行のときに生えているのをみたけど、エリスの一本筋には産毛さえも生えてくる気配はなかった。
　ただ、おしっこに濡れた花びらは、おねしょを咎められるのを怖がっているかのようにヒクヒクッ、小刻みに震えている。

「ごめんなさい……マリアに、こんなこ

とさせちゃって」
「私は全然気にしてないですよ？　むしろエリス可愛い～って抱きしめてあげたいくらいですから」
「そ、それは恥ずかしいからやめてなの」
「ええ。我慢します。そういえば、今日は学校の発表会でしたっけ？」
「うん。合唱コンクール。エリスはピアノを弾く係なの」
「それじゃあ……昼もおむつ充ててたほうがいいですよね」
「う、うん……」

　エリスは頬を赤らめながら頷く。
　エリスはおねしょ癖が抜けていなかったし、それに極度に緊張すると、おもらししてしまう癖もあったのだ。
　合唱コンクールの舞台なんかに立ったら、間違いなくおもらししてしまうことだろう。

　マリアは用意してきたお湯とお手拭きで、おまたを綺麗に拭いていってくれる。
　グショグショになったおむつを、お尻とベッドのあいだから引き抜いて、お尻

も綺麗に拭いてくれた。

「それじゃあ、新しいおむつ、あててあげますからねー」
「お、お願い、なの……」

　新しい紙おむつをお尻の下に敷かれると、おまたを包み込むようにして生地をあてていかれる。
　その紙の生地を、横からテープで留めれば、紙おむつの完成だ。

　ポンポンッ。
　マリアは、おむつの上からエリスのおまたを軽くはたく。

「はい、完成です♪」
「はふう……。お尻も、おまたも、温かいの……」

　エリスは、こうしてマリアにおむつの上からおまたをはたいてもらうことが大好きだった。
　なんだか安心できるような気がするのだ。
　だけど、ちょっと力を抜きすぎただろうか？

プシュッ――。

　新しいおむつを充ててもらったばかりだというのに、ちょっとだけチビってしまった。

「エリス……もしかして、もう？」
「だ、大丈夫。これくらい」
「ダメそうなら早く言って下さいね？
さてさて、おむつを充ててあげたから、次はお洋服ですねー。せっかくの晴れ舞台だから、可愛いお洋服がいいですよね」
「うん……。マリアに任せるの」
「任されました。任せて下さい♪」

　嬉々とした笑顔を浮かべた、姉のようなマリアによって、エリスはあっという間に着せ替えられていくのだった。

☆

「マリアが着せてくれたお洋服……。ちょっと可愛すぎるかも……。恥ずかしくない……？」

いつものように大型リムジンで登校してきたエリスは、頬を赤らめてしまった。

マリアが選んでくれた洋服は、シックな紺色の上着に白のシャツ。
胸にはピンクのリボンがついている。
そのリボンよりも大きいものが、銀色の髪の毛をまとめ上げていた。

そして極めつけが、気合を入れろといわんばかりに短いスカートだった。
ふりふりのフリルがついたスカートは、ちょっとでも気を抜いたら、パンチラならぬオムチラをしそうで怖い。

「おはよう、エリスちゃん」
「……おはよう」
「エリスちゃん、今日も可愛いリボン」
「……ありがとう」

挨拶を交わしてくれるクラスメートたち。
このつぼみ学園は、エリスの父親が私財を投じて運営している学校だった。

教室に行くと、今日は年に一度の合唱コンクールということもあって、みんな気合十分のようだ。
発声の練習をしたり、前髪を気にしたりと、教室は落ち着かない雰囲気に包まれていた。

今日は授業はない。
全校生徒が文化ホールに集まって、一日をかけて歌声を競うことになっている。
クラス対抗のコンクールで優勝することは、どのクラスでも一つの大きな目標となっていた。
もちろん、そのためには優秀なピアノの演奏者も重要になってくるわけで……。
担任が入ってくると、クラスメートたちは大人しく席につく。
そんな生徒たちに、担任は言う。

「今日は年に一回のコンクールだ。みんなの青春の１ページに、今日という日を刻みつけられるように頑張ってくれよな！」
『はーい』

そして担任はエリスに視線をやると言うのだった。

「橘、今日のピアノの演奏は任せたぞ」
「……はい。先生。精一杯頑張ります」

エリスは教師の言葉に、無表情で頷く。
ただ、表情には出ていないが……。
エリスの小さな身体、その両肩には、じわじわと重たいプレッシャーがのしかかっていた……。

☆

「もうすぐエリスたちの順番……」

エリスは、ピアノ演奏者が通される楽屋で、一人呟いた。
合唱コンクールは一年生から順番に発表していき、エリスたちのクラスはクライマックスを飾ることになっている。
緊張しないようにと楽譜に視線を落としていたけど、どうしても気になってしまうことがあった。
……それは。

「見えてない……？　もう、マリアったらこんなに短いスカート選ぶなんて……」

　エリスは姿見の前に立って、自らの姿を映し出してみる。
　ちょっとおめかしした可愛らしい洋服に身を包み、自信なさげな表情を浮かべた少女の顔が覗き込んできていた。

　スカートを捲り上げてみると、そこにはモコモコに膨らんだ紙おむつが露わになる。

「おむつ……ちょっとカサカサしてるけど……隠しきれてる、よね……。見えて、ない、よね……？」

　短いスカートの裾を整えると、紙おむつをなんとか隠すことはできているようだった。
　……大丈夫。
　ちょっとだけお尻が膨らんで、セクシーになっているような気もするけど。

（大丈夫、大丈夫……。なにも緊張することはない……。いっぱい練習してきた

し、絶対に失敗しない……）

　自分に言い聞かせるように、何度も心の中で呟く。
　……が。
　小さな身体は正直だった。

　ブルルッ！

　エリスは、急に寒気を感じると、身震いしてしまう。
　緊張のあまり、トイレに行きたくなってしまったのだ。

「どうしよう。こんなときにおトイレ行きたくなっちゃうなんて」

　タイミングが悪いことに、楽屋の外からは、一つ前のクラスの歌声が聞こえてきている。
　今からトイレに行っていては間に合わないだろう。
　ピアノ演奏者がトイレに行って出てこないなんて、恥ずかしすぎる。

「最後まで、我慢しないと……」

大丈夫。
ほんの数分間ピアノを弾くだけなのだ。
たったそれだけの短い時間を我慢すれば、それでいい……。
我慢すると心に決めると、ちょうど楽屋のドアがノックされた。
顔を出したのは、クラスメートの女子だった。

「エリスちゃん、もうそろそろ出番だよ？」
「うん。分かったの……」

エリスは人知れず尿意を抱えながら、楽屋を後にする……。

☆

楽屋から舞台袖に行くと、そこにはクラスメートたちが緊張した面持ちで控えていた。
クラスメートたちは、

「エリスちゃん、緊張するね……」
「最後だから、みんな注目してるよ……」

ヒソヒソ声で話し合っていた。
こうして待つこと数分。
舞台で歌っているクラスが終わると、次はエリスたちの番だ。
担任はやる気満々のようだ。
舞台袖に立って、生徒たちに指示を出している。

「それじゃあ……、まずは指揮者を先頭に舞台に上がってくれ。おっと、橘は最後でいいぞ」

他のクラスメートたちに混じっていこうとするエリスだけど、担任に止められてしまった。
そういえば……、
ピアノ演奏者は、最後に舞台に入って、みんなの前で一礼することになっていたのだ。
エリスは、緊張するあまり、そのことを忘れてしまっていた。

「大丈夫……。緊張なんてしてないんだから……」

何度も言い聞かせても、手のひらから

は汗が止まってくれない。
　こういうときは、手のひらに『の』の字を書いて飲み込めばいいって聞いたことがあるから、

「の、ののの、のの字……ごくんっ」

　震える指先で書いて飲み込むも、空気を飲み込んでしまって、

　プシュッ！

　おまたに広がる、じんわりとした生暖かい感触。
　どうやら、ちょっとだけチビってしまったようだ。
　緊張するあまり意識していなかったけど、膀胱はキシキシとした痛みを感じるほどに膨らんでいた。
　お腹のなかで水風船が膨らんでいるみたいだ。

（お、おトイレ行きたい……）

　今からでも行かせてもらえないだろうか？
　そんなことを思っていると、しかし現

実というのは無情だった。
『それでは最後のクラスになります。はたして優勝候補の筆頭として期待されているこのクラスは、どんな感動的なラストステージを聴かせてくれるのでしょうか!?』

　無駄にハードルを上げる司会者に、指揮者の生徒を先頭として、クラスメートたちが舞台へと上がっていく。
　舞台袖に残されたエリスだったが、

「それじゃあ期待してるからな。ピアノ、頑張ってくれよ」

　なにも知らない担任に背中を押されて、エリスはよろめきながらも舞台に立つことになった。

（やだ……。みんな、見てるの……っ）

　舞台の中央まで歩いてきたエリスは、観客たちに向き合う。
　父兄たちも来ているから、絶対に失敗はできなかった。
　よほど銀髪のエリスのことが珍しいのだろう。

　奇異の視線で、エリスは見つめられることになった。

「あらあら……。お人形みたいに可愛らしい……」
「肌なんて、透けるように真っ白……」
「この学園の理事長の娘さんらしいわよ……？」

　ザワザワとした声だけど、エリスに向けられている言葉は聞き取ることができてしまう。
　可愛らしい、将来が楽しみ、ピアノが弾けるなんて……。
　そんな賛美の言葉を並べてくれる保護者たちだけど、まさかエリスがスカートの下におむつを穿いているなんて想像さえもしていないだろう。

（ああっ、だめぇ……。そんなにエリスのこと、見ないで……）

　舞台の中央に立っているエリスを、スポットライトが照らし出す。
　リハーサルでは、ここでエリスが一礼をして、ピアノへと歩いて行く予定になっていたが……。

（ううっ、お腹、苦しくて……お辞儀、できない……っ）

　水風船のように張っている膀胱を抱えたままお辞儀なんて、できるはずがなかった。
　少しでもかがんだら、プシュッとやってしまいそうだ。

（ああ、こんなエリス、見ないで……。そんなに見られたら緊張して……えっ、ええええ……？）

　ジュワ……ッ。

　おまたが生暖かくなったと思ったときには手遅れだった。
　大事な部分を、イタズラっぽくくすぐられる感触に、エリスの膀胱は決壊してしまっていた。

（うそ……。エリス、おもらししちゃってるの……？　みんなに見られてるのに……っ）

ぷしゅ、しゅいいい……。
しゅわわわわわわわわ……。

（う、うそ……勝手に漏れちゃってる……？　ああ、だめ、おまたが暖かくなって……くすぐったいよ……）

おむつに弾けたおしっこが、パシャパシャとおまたをくすぐっている。
そのむず痒さに、エリスの尿道は更に解けていくことになった。

しょわわわわわわわわ……。

（おしっこ、止まらない……。ううっ、勝手に出てきちゃって……ああ、おまた、温かいよ……）

垂れ流し……。

その状態は、まさに垂れ流しといっても過言ではなかった。

エリスは、緊張のあまりに、おしっこを垂れ流しすることになってしまっている。

（お願いします。せめて音だけは、誰にも聞こえないで……）

おむつの中では、おしっこが飛び跳ねて、おまたを濡らしてから吸水ポリマーへと染みこんでいっている。
その音が誰かに聞こえないかと、気が気ではなかった。
それにこんなに漏らしていると――。

（ううっ、おむつ、モコモコになってきちゃってる……！　足のあいだで、膨らんできちゃってる……っ）

短いスカートからおむつが見えていないだろうか？
エリスは内心、気が気ではなかった。
それでもなんとか無表情のままでいられるのは、普段からあまり表情を表に出さなかったからだろう。

しゅいいいいいいいいいい……。
もこもこ、もこもこもこ……。

勝手に漏れ出してしまうおしっこに、おむつが入道雲のように広がっていく。
垂れ流されるおしっこは、お尻のほうにまでその温もりを広げていた。

（くすぐったいよぉ……）

パシャパシャと、おむつの内側に弾けるおしっこ。

「ぁっ、ぁっ、ぁっ、ぁっぁっぁぁぁ」
おまたをイタズラっぽく撫で回される感触に、ついにエリスは小さく呻いてしまう。
酸欠になった金魚のように口をパクパクさせながら。

もこもこと、太股のあいだで盛り上がってくる感触。
おしっこを吸った紙おむつは、ずっしりと重たくなってくる。
いくら最近の紙おむつが優れているとはいえ、質量保存の法則には敵わない。
漏らした分だけ、おむつは重たくなるのだ。

（お願い、スカートから見えないで……。おむつ、ずり落ちてこないで……重たくなって、きてる……うっ。脚の間で、たぷたぷしてるの……っ）

じょぼぼぼぼぼぼぼぼ……。
ブルルッ！

小さな身体が、一度だけ大きく震える。
それはこの公開失禁が終わった合図でもあった。

（終わって……くれた？　おしっこ、止まってる……？）

そんなことを考えながら、スカートのおまたの部分をギュッと握りしめる。
……大丈夫。
なんとかおしっこは止まってくれたようだ。
紙おむつは、エリスの失敗を、優しく受け止めてくれたのだ。
だけど、もう紙おむつは限界みたいだった。

（たぷたぷして……モコモコしてるの……。おしっこで、おむつ、落ちてきそうなくらい重たくなってるよ……っ）

　このまま立っていたら、いつ紙おむつが落ちてくるかも分からなかった。
　それでもエリスは、なんとか観衆に向けて一礼をする。
　それはとても小さな会釈だった。
　もしもここで深くお辞儀なんてしたら、後ろに立っているクラスメートたちに、モコモコに膨らみきっている紙おむつを見られてしまうかもしれなかった。

　エリスが一礼をすると、会場が割れんばかりの拍手に包まれる。
　その拍手を背に、エリスはピアノの前に置かれている椅子に座るが……、

　グチョッ。

（あううっ、気持ち悪い……）

　スライム状になった紙おむつが潰れて、お尻の割れ目に食い込んできた。
　それでも、顔に出すわけにはいかない。

そして演奏を放棄するわけにはいかなかった。

（お願いします、神様。早く演奏が終わって下さい……。そうしないと、エリスはおかしくなってしまいます……！）

――それからの記憶は、あまり定かではなかった。
必死になって鍵盤に指を躍らせ、ペダルを踏むたびに、

グチョッ、グチョチョッ！

スライム状になったおむつがおまたやお尻にまとわりついてきて、それでもエリスはその気持ち悪い感触に耐えながらも演奏を続けていった。

しょわわわわわわわ……。

おまたが再び生暖かくなっている感触。

（やだ……また漏れ出しちゃってる……。おしっこ、勝手に漏れてきちゃってるの……！）

スカートのなかが、妙な感じで蒸れてくる。
それにスカートが微かに湿っているような感触もする。
もしかしたら、おむつから横漏れしてきて、スカートにはスタンプのように尻染みができているかも知れなかった。

（でも、みんなのために、最後まで頑張らないと……！）

おもらししながらも、なんとか頑張れるのは、みんなの歌声があったからだと思う。
みんなと一緒にたくさん練習してきたのだ。
それを、エリスの失敗で台無しにするわけにはいかなかった。

「はぁ……、はぁ……、はぁぁ……」

最後のオタマジャクシを弾き終えたとき、エリスの頬は桃色に上気していた。
エリスは、なんとかピアノを弾ききることができたのだ。

（やっと、終わった……。ああ、もうおむつ、グチュグチュになってる……。落ちない？　大丈夫？）

　ぼんやりとした意識のなか、なんとか椅子から立ちあがる。
　最後は演奏者であるエリスが、みんなの前に立って一礼をしなければならなかった。

（やだ、お尻、湿ってる……）

　そっとお尻を触ってみると、やはりおむつから横漏れしていたのだろう。
　スカートのお尻の部分は、かすかに湿っていた。
　指先の匂いを嗅いでみると、ツンとしたアンモニア臭が鼻を突く。

（お願い、こんなエリスを見ないで……）

　それでもここで逃げるわけにはいかなかった。
　エリスはみんなの前に立つと、軽く一礼をする。
　すると観衆たちは、まさかエリスがお

もらしをしているとは知らずに拍手喝采し、様々な美辞麗句を並べるのだった……。

☆

「な、なんとか終わった……。みんなに、バレてないよね……？　エリスがおしっこ漏らしちゃったなんて……」

　演奏を終えたエリスは、おぼつかない足取りでなんとか楽屋へと戻ってきた。
　幸いなことに最後の演奏者だったので、楽屋には誰もいなかった。

「ああ……。やっぱりスカートに染みになっちゃってるの……」

　姿見の前に立って、自らの姿を映し出してみる。
　お尻の部分を映し出してみると、シックな色のスカートには暗い染みが浮き上がっていた。
　お尻の両脇に一つずつ。
　それはおむつから横漏れしてしまった恥ずかしい染みだった。

「マリアに怒られちゃう……。でも、全部弾けてよかったの……」

　エリスは姿見の前で、自らの姿と向き合う。
　ほっぺたを桃色に染めて、自信なさげに覗き込んできている自分の姿。
　そんな少女は、スカートを捲り上げる。

「こんなに漏らしちゃってたなんて……」

　ツ〜ン……。

　としたアンモニア臭が、狭い楽屋に満たされる。
　短いスカートから露わになったのは、鮮やかなレモン色に染め上げられて、もこもこに大きく膨らんだ紙おむつだった。

「もう、たぷたぷ……。それに……ずっしり重たくなってるの……ああ、こんなに厚くなってる……」

　その感触を確かめるように、エリスは

右手で自らのおまたを包み込んでいるおむつを撫でたり、軽く押したりする。
　が、幼い身体はすぐに、身体を小さく震わせる。

「おしっこの匂い嗅いでたら……またおしっこしたくなっちゃった……。ここで、しちゃうの……？　ダメだけど……、でも、おむつ当ててるから大丈夫……？」

　エリスは、戸惑いながらもおまたの力を抜いていった。
　ジュワッとおまたが生暖かくなって、

しゅいいいいい……。
　ぽしゃ、ぽしゃぽしゃぽしゃ……。

　おむつからくぐもった水音が聞こえてきて、大きく膨らんでいた紙おむつが、更に大きく膨らんでいく。
　舞台でおもらししてしまったとはいえ、無意識のうちにブレーキがかかっていたのだろう。
　だけど今のエリスは、すっかり紙おむつに身を任せている。
　おむつは、エリスの失敗をすべて受け

止めてくれるのだ。

「ああ、温かい……。気持ち、いいの……」

ぷしゅいいいいいいいい……。
もこ、もこもこ……。

エリスは頬を弛緩させて、恍惚とした表情を浮かべて尿意を解放している。
そんな失敗も、紙おむつはすべて受け止めて、優しくお尻を包み込んでくれる……。

「ふっ、ふう……っ」

ブルルッ！
エリスは小さく身体を震わせて切なげなため息をつくと、何事もなかったかのようにスカートの裾を元に戻すのだった。

☆

だがこのとき、エリスは知るよしもなかった。
合唱コンクールで見事に優勝すること

ができたエリスたちのクラスは、学園のホームページに大々的に載ることを。
　その代表として、舞台に立つエリスの写真が載ることを。
　エリスはまだ知らない。

　そして観衆も知らない。
　大きく膨らんだスカートのなかで、エリスが失禁していると言うことを……。

　誰も知らない、スカートのなかの秘密。

おしまい♪

～次のページから既刊案内！～

ブルマ、
脱げなくて

大決壊！
レモンの水たまり